アイヌのツス（Tusu）とツスクル（Tusu-kur）

三田村成孝

北海道のアイヌ民族の間にツスといわれる憑依現象がある。このツスをする人のことをツスクルというのであるが、現存するツスクルは非常に少く、それも日高方面に限られてしまっている。私の調査資料もこの方面のものが中心となっているが、数少い他地域のものとして樺太アイヌのものも得ることが出来た。

本論ではこのツスの構造・機制およびツスクルに見出される諸特徴をみていってみる。

現在ではツスといっても東北地方の仏降ろしなどの影響も見られ、大分伝統的な姿とは異っているように思われる。よって、これからの論述は現在を手がかりにしながら、文献等によってより伝統的な姿を再構成し、そこにツス、ツスクルをみてゆくという行き方をとらざるを得ない。致し方のないことなので、そのように論を進めてゆく。

そこで先ず、ツス、ツスクルについてみてゆく前に、これらを保持するアイヌ民族について特にその信仰一般をみておくのが以後の理解に都合がよいと思われるので、それから始めることにする。

一

アイヌの間で医療活動に従事しながらアイヌの研究を行った英国人医師マンロー氏（N. G. Munro）は、アイヌの宗教について「三つのアイヌの言葉がアイヌの宗教の主要な

特徴を指し示している。ラマット、カムイそしてイナウである[1]」と述べている。

先ずラマット(Ramat)とは、バチェラー氏(J. Batchelor)の辞書に「ramat, n. The mind, Spirit, Soul, The essence of a thing, The meaning of a word. Jap. 霊魂、心、元素[2]」とあるように、この世のありとあらゆるものに宿っているとされる魂のことである。このラマットについてマンロー氏は、幾人かの古老の言を引いて「私の情報提供者である幾人かの長老(ヱカシ)により私に与えられた説明を引用することにしよう。コタンピラは、ラマットはアイヌの宗教の背骨であると言った。八十歳の非常に活動的で知的な、北海道北部からやって来たというレンヌイケシュは、ラマットを持たないものは何もありえないと言った。ニスクレクと他の長老達は、ラマットはすべてに行き渡っており、そして破壊できないものであるということに同意した。ウエサンアシュは、ラマットはどこにでもいるといった[3]」と述べ、さらにラマットと物との関係について「物が燃えるか壊される時、ラマットはそれらを空にする。生きているもの——人々、動物、木または植物——が死ぬ時、ラマットはそれらを去り、どこかへ行ってしまう。しかし消えてなくなりはしない。このために、死者と共に葬られる武器や道具はしばしばそれらのラマットが死者の伴をしていける様に壊される[4]」と述べている。

このような性格をもつラマットと非常に密接な関りをもつものとして次のカムイ(Kamui)がある。

カムイについてバチェラー氏の辞書には「Kamui, n. A god. A title applied to anything great, good, important, honourable, bad, fierce, or awful, hence used of animals and men, gods and devils. Jap. 神(尊称或ハ畏懼ノ称ニ用ユ)[5]」とある。これからも分かるように、アイヌのカムイは今日我々が持つような神の観念とは大分異なっている。すなわち、アイヌにとってカムイとは、自分達に恵みを与えてくれるもの、または自分達に大きな害を与えるもの、その他、畏怖の念を起こさせるようなもの全てをいうのである。このカムイを、アイヌは様々なものに対し用いるので、一体どこにカムイと認める基準があるのか迷うのであるが、それでもカムイは無制限に用いられるわけではなくて、ある程度きまったものに対して用いられているようである。このカムイの分類について、マンロー氏は「アイヌにその様なものとして認められたカムイの厳密な分類は可

能ではないが、いくらかの整理は記述を助けるであろう[6]」と述べて一応次の八つに分類している。「一、遠くにいる伝統的カムイ、二、身近な、または近づきやすい、頼りになるカムイ、三、補助的カムイ、四、動物の姿をしたカムイ、五、霊的補助者で人格的カムイ、六、いたずらな、害をなすカムイ、七、流行病のカムイ、八、言語に絶した恐怖のもの[7]」そして、これらの各々に様々なカムイがいて、それぞれ人間との関りに於けるある役割を果しているわけである。これらのカムイのうちで、アイヌにとって最も重要なものは、分類の二の中に入っているアベカムイ（Abe-kamui 火の神）である。このカムイは人と他のカムイとの間の仲介役をつとめ、アイヌの冠婚葬祭に重要な役割を演ずる。この他重要なカムイとして神聖なる東窓（rorun-puyar）の外の幣場（nusa-san）に祭られている神々がいるのであるが、今はこれ以上触れないことにする。

さて、このカムイは神謡（Kamui-yukar）などに悪いことをして人間にこらしめられる者として出てくるなど[8]、人間と対等の関係、あいみたがいの関係にあるものとみなされている。そして、その住む国は山野の獣（Kamui）は里川の水源地の雲に聳える奥山、鳥（Kamui）は天上、魚（Kamui）は海底とされている。また人間も死ぬと地下にある神の国へ行くものとされている。そして、このカムイの国に於ける神々の生活は、人間と同じ身体を具え、家を建て、夫や妻、子供を持ち、全くこの世の人間の生活と変わらないという[9]。

これらのカムイと密接に関るものとして、次にイナウ（Inau）についてみてみることにする。

イナウについてバチェラー氏の辞書には「Inao, n. 神々への捧げ物として地面に立てられる柳の木の削り掛け。イナオはいかなる意味でも崇拝されず、単なる捧げ物である。それらには一般に捧げ主がだれか神が分かる様にある印や記号が示されている。アイヌの観念では、他人のイナオを盗んだり隠したりするより大きな罪はなく、神々がイナオの捧げられていないことを知るとその好意を引っ込めるという。アイヌに与えられる名前で、イナオサクグル即ちイナオのない人という名前ほど悪い名前はない。Jap. 幣[10]」とある。これは捧げるカムイによって材料となる木も異なるという[11]。

このイナウの機能については、祭られる神を表す神体、アイヌの言葉を神に伝える代弁者、それ自身が霊を有する

守護神といったものがあげられる。[12] ただバチェラー氏などは、辞書でみる限りイナウを単なる供物という風にしか捉えていないが、これに対してはいろいろ批判があり、バチェラー氏自身後にそれ以外にここに掲げたような機能のあることを認めている。[13] やはりイナウを単なる供物とみる事には無理があるようであり、近年ではイナウはアイヌの言葉を神に伝える代弁者、仲介者の機能をその中心的なものとして持つという考え方が取られてきている。[14]

このイナウの分類についてはカムイの時と同じく正確に分類するのは難しいのであるが、その形の上から大まかに分類すると、一、キケチノエイナウ（Kike-chinoye-inau）、キケパラセイナウ(Kike-parse-inau)、二、イナウキケ（Inau-kike）、三、チェホロカケップイナウ（Chehorkakep-inau）、四、キケウシパスイ（Kike-ush-pashui）、五、シュトイナウ（Shutu-inau）、六、タクサイナウ（Takusa-inau）の六つに分けられる。[15] このうち最も簡単なものは五のシュトイナウで、これは一本の棒の木皮を所々に半ば剝ぎ、いわば木皮の削り掛けをつけているもので、小刀さえあればすぐに作ることの出来るものである。知里真志保氏は、これがイナウの原型であろうとして、シュト（Situ 棍棒）→シュトイナウ（Situ-inau）→イナウといったイナウの発展過程についての推測をなしている。[16] これらのイナウのうち一番格の高いのは一のキケチノエイナウで削り掛けを数本ずつより合わせて作られる。

これらのイナウを捧げる場所については大体決っており、屋内では炉の中（Abe-kamui 火の神）、宝物・武器・狩猟具を置く部屋の東北隅（Chise-kor-kamui 家の神）、入口、窓などで、屋外では神聖な東窓の外の幣場、水汲場、船着場、村（Kotan）の境などである。[17] これらのうち最もイナウのまとまって捧げられているのは屋外の幣場で、そこでは決ったカムイに決ったイナウが所定の場所に捧げられている。

以上、マンロー氏の説にそってツス、ツスクルと関るアイヌの信仰一般についてみてきた。次にツスの構造・機制をみていってみることにする。

二

ツスについてバチェラー氏の辞書には「Tusu, vi. To prophecy. Jap. 預言スル」[1] とあるが、金田一京助氏も

「尤も、私の茲に云う巫呪とは、アイヌの方のツス（tusa）を指す。アイヌに祈禱、禁厭の外にも尚雑多の類似のことがあって入組んでいるから、実は此のツスも巫呪と訳していいんだかどうだか、むずかしい」[2]と述べているように、アイヌには様々なまじない等がたくさんあって、普通一般に用いられている巫術という言葉も、適当かどうか難しいところである。

このツスを金田一氏は「尤も tusu にも咀と占と二つの方面がある。呪咀の方は今日話す事さえ避けられる傾きがあって詳しく知り難いのであるが、占の方の事は、現に尚行はれてゐるらしいので、色々の事を聞く」[3]と述べて、咀と占とに分けているのであるが、ここで一応私なりにアイヌの間にあるまじないの類を整理してみると、これは大きく呪と占とに分けられ、呪はさらにまじないとのろいの二つに、占も多くツスクルの関与するものと針・刀・弓を用いたり、先祖伝来の動物の頭骨を用いたりするものとの二つに分けられる。

まじないとは赤ん坊の夜泣きを止めるまじないや目に入ったゴミを取る時のまじない、焚火がはねるのを防ぐまじない等[4]々、多く日常生活に於いて困った事に対するもので、特定の動作、道具、呪文などを伴っている。次ののろいは、金田一氏のいう咀に当ると思われるが、これについて金田一氏は、ユーカラ（Yukar）を例にとって「女が人を嫉んで、巫呪で以て気狂にさせることが又ユカラには絶えず見えてゐる。チシナプカムイ（草人形）といふユカラには、主人公の花嫁が他村の女の呪で裸になって手を打って歌ひ、躍り狂ふので、主人公が怒って引摑んで投殺す悲劇が述べてある」[5]と述べているが、しかしこれは何もツスクルに限って行われることではない。例えば、アイヌの間にはポニタック（pon-itak 小・言→呪言）といって、誰にでも恐ろしがられ、日常会話でも触れるのを避けるのろいがある。これは人形を作ったり、炉に火箸をさしこんだりして呪言を唱えてするという。その呪言は、簡単でわずか数語とされ、悪魔だけに使い、その伝授は暗夜の夜中にひそかに黒いツキ（tuki 杯）を用いて行ったり、家の西にある便所の傍で着物をかぶって、たった二人で行うという。その効力は、人間以外に熊にかけても効力があり、飛ぶ鳥も落とすことがあるといわれている[6]。

占は、金田一氏のいう占と同じで、去就に迷った場合に行うものである。このうち先祖伝来の動物の頭骨を用いる

例として、白老地方のものをみてみると、そこでは狐の頭骨をシッンベカムイ(shitumbe-kamui)といい、祈詞を述べてからシッンベカムイを取り出し、下顎をはずして自分の頭の上にのせ、頭を前に下げて下に落とした時、顎の歯が上向きになれば吉兆、下向きになれば凶兆として去就を占ったという。(7)

一応以上のようにアイヌの間にあるまじないの類を分ける時、ツスクルの関与するのは呪の中ののろいと占の中のツスクルの関与するものとであるが、しかし主なものは占の方である。この占の方のツスクルの関与するものについては後で具体的に触れることにする。

さて、このツスの構造・機制に於いて最も重要なものが憑神(turen-kamui)である。憑神についてAA媼は竜神様、KM媼は天神様が自分の憑神だと言っていたが、アイヌは人には全て憑神があって、人間の賢愚、能不能、運不運はその憑神によるものと考えている。

藤村久和氏は、この憑神を分類して、個人の憑霊と人間集団への憑霊との二つに分け、個人の憑霊をさらに、個人の守護霊、呪術者の守護霊、非常時の守護霊、神が返礼としてなる守護霊、個人との因果関係で加害する霊、個人との因果関係をもたずに加害する霊の六つに細分し、このうちの前二者を先天的なもの、後四者を後天的なものとし、人間集団への憑霊については、祖先霊、祖先神の霊、集落の守護霊、家族の守護霊、非常時の守護霊の五つに分け、そのうちの前二者を先天的なもの、後三者を後天的なものとしている。(8) ここで問題なのは、個人の憑霊のうちの呪術者の守護霊であるが、この霊は個人の守護霊に比べて強力であり、その数も二、三霊位憑いていて、問題の難易によって出て来る憑神が違うという。(9)

ツスクルは自身に憑いているこの憑神により巫力を与えられる。この巫力によってツスクルは様々な能力を発揮し、村人の要請に応えるわけであるが、しかし村人の要請がなくても憑神がツスをさせることもあるという。この例は、私が道東を回った時、阿寒湖畔のYT翁から昔いたすばらしいツスクルの話として聞かせてもらった。(10)

ツスになくてはならない人としてエカシ(ekashi古老)がいる。エカシはツスクルと共に居て、ツスの前に神に祈りを捧げ、ツスクルの憑依して宣べる言葉を解釈して村人に伝えるのが役目である。

さて、ツスクルについてであるが、バチェラー氏の辞書

には「tusu-guru, n. A prophet. A wizard. Jap. 預言者、占者」[11]とある。ここでは特にツスクルのクル（kur）の語義を通してその性格をみていってみることにする。

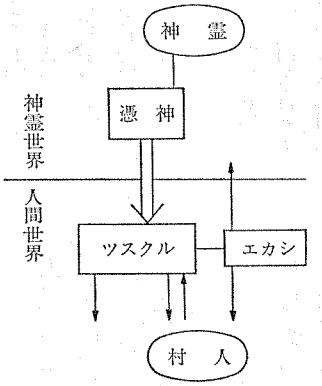
クルについてバチェラー氏の辞書には「Kuru or Guru, n. A person. Jap. 者、人」[12]とあるが、これを批判し、その持つ意味について知里氏は「バチェラー博士の辞書をみるとこの語を独立の名詞として扱い「人」なる訳語を与えている。しかし、これも間違いである。今のアイヌ語では「クル」は接尾辞にすぎず、動詞あるいは形容詞に付いて「……するおかた」という意義をあらわすこと金田一博士の訳語のとおりである。しかしながら、ひろくこの語の用語例をしらべてみると、古くは独立の名詞で「神」あるいは「魔」の意味をあらわす。日本語から「カムイ」kamuy（やはり「神」および「魔」の意をもつ）という語が取り入れられ普及される以前は名詞として自由に用いられたらしい」と述べ、魔の意味、神の意味[13]、黒人の意味の三つの意味を用語例を示して挙げている。

みてきたように、ツスが憑神によってなされるものであることを考える時、このツスを行う巫女の呼称であるツスクルのクルは、明らかに「魔」、「神」と深い関りを持つものと思われる。

このツスクルは、ユーカラにはヌプルペ（nupur-pe）として出てくる。ヌプル（nupur）とは「畏敬すべき」、「おそるべき」、「尊き」の意味の語で、名詞にも使われて「畏るべき法術」[14]の意味を表わす。ペ（pe）とは「もの」という意味である。

こうして、ツスクルは神霊世界と人間世界との仲介者であり、この二つの世界に同時に関る、いわば半人半神的性格を持つ者であることが分かる。

以上、述べてきたことを図に示して一応のまとめをしておく。



さて次に、その精神的基盤がツスに繋がるものがあると

されているイム(imu)について、非常に参考になると思われるので、ここで触れておくことにする。

イムについてバチェラー氏の辞書には「imu イム、imuki イムキ、狂せる、ヒステリヤ、adj. and vi. A kind of hysteria. Rabid. Mad. To be attached with sudden fits of hysteria」[15]とあり、その他に「im-bakko. イムバッコ、ヒステリヤニカカッタ老婦人、n. Any old woman subject to fits of imu or hysteria」[16]、「imu-imu イムイム、im-imu-ki イムイムキ、烈シキヒステリヤ、adj. and vi. An intensified form of imu」[17]とある。このイムをAA媼は「イムっていうのは猿みたいなもので、こっちのするのをそのまま真似るもんです。そして、何か口走るんです。それはイムして言ってるんです」といい、イムとツスとの関係について婆ちゃん(母)がいっていたといって「ツスとイムは夫婦のもあるし、兄妹のもある」と話していた。この夫婦、兄妹ということがイムとツスとの間に於けるいかなることを意味しているのかは明らかでないが、もしかしたらどちらに於いても無意識的なるものが働くから、その辺の類似を指しているのかもしれないがよくは分らない。

このイムの出来る人は現在でも大分おり、イムという言葉も「イムする」というふうに使われている。そこで、少しの間ではあったが、AA媼とKM媼に実際にやってもらった。AA媼が木の棒を振り上げ、ヤーヤーというと、KM媼も両手を上げて、ヤーヤーといい、KM媼が早口に「あーどしたの、なにしにそんなことをするんだ」と言う。そんなことを二、三度くり返してから、今度は一緒に長イスに坐って、手拍子をとりながら歌をうたい出した。その歌の合間にKM媼が小さな声で何かブツブツとつぶやくのだが、何を言っているのかは聞き取ることは出来なかった。やがてAA媼が、これがイムだよといって終った。

知里氏はイムの意義について、一般的な軽い意味、一種のヒステリー反応、巫者が異常意識に入って反射的に行う跳躍の三つを区別している[18]。最初の一般的な軽い意味というのは、何かに驚いた拍子に発する反射的な動作、叫び、文句をいい、この文句は個人により一定していて、目前の事象とは何の関係もない、概して卑猥な文句が多いという。次の一種のヒステリー反応については、内村祐之氏等の詳細な研究があるが、それによるとイム(imu)は、躁暴状態(逃避動作、反抗動作)、反響症状(反響動作、反響表情、反響言語、命令自動および強梗症)、反対動作、理性制止退行

（陰部暴露、性的言行）の四つに分けられる。[19] 私がしてもらったイム（imu）は、このうちの反響症状の中の反響動作にあたり、歌っている最中にKM媼がブツブツ何かつぶやいたのは、知里氏のいう最初の一般的な軽い意味に当るものと思われる。ここで最も問題となるのは、最後の巫者が異常意識に入って反射的に行う跳躍である。知里氏は今まで挙げたイムの意義のうち、これが最も原義に近いものであろうと述べて、北見地方のサコルペ（sakorpe 英雄詞曲）の中の次の一節を引いている。

「太鼓の胴を打てば、太鼓の唄う声、鏘然の音して、美しく鳴りわたり、跳躍が二つも、跳躍が三つも、つながって出る、どこから来る巫謡、なのだろうか、二つの巫謡のふし、三つの巫謡のふしが、長々と続く」

このイムとツスとの関係にも触れて、内村氏等は次のようなまとめをしている。

「嘗テハ男性ニモ見ラレタガ、今日デハ殆ド総ベテ中年以後ノ女性デアッテ、唯一人樺太ニ於テ男性ノ患者ガアルトイフ事ヲ伝聞シタニ過ギナイ。（中略）家族内ニいむヲ有スル割合ガ非常ニ多ク（中略）自己催眠ニヨッテ呪術ヲ行フつすノ大部分ガ同時ニいむデアルコトハ、他ノいむノ諸現象ノ特徴ト相俟ッテ、いむガあいぬノ原始性ニ基ズク固有精神ト推感性亢進トニ基礎ヲ置ク一ツノ心因的反応現象ナルコトヲ思ハセル」[20]

以上、イムについてみてきたのであるが、私は内村氏等のようにイムを一種のヒステリー反応として捉える以外に、金田一氏も「さう云ふことで、よく小供などが祖母をからかって、皆が哄と笑ってゐる。之を気の毒に思って見てゐると、アイヌの方ではさうやって皆に笑はれ、面白がられ、いとしがられるのは蛇がさせるのであって、興がって物など恵まれるから結局幸福なのだと。（中略）あれは、自分が蛇につかれてイムーをするといふ潜在意識を持ってゐて、一つは誘発されて、一つは習慣的に、半ば意識してやることではないかと思ふ」[21] と述べているように、コタン（kotan 村）内での一つの娯楽という面から捉えていくことも必要ではないかと思っている。

三

これまでみてきたツスに於いて、その中心をなすツスクルには、いかなる特徴が見出されるであろうか。これから

そのいくつかを見ていってみることにする。

先ず第一に外面的特徴として、女性ということが挙げられる。この事は金田一氏も、アイヌの女性は全てがツスクルであったということも言っており、[1] 現在いるツスクルも全て女性で、男性は一人もいないということから一応特徴として指摘出来るかと思われる。しかし、バチェラー氏は男性ツスクルの存在について、その著書の中に「彼」という言葉を用い、「男女の魔術師」という言葉を用いたりしており、[2] 久保寺逸彦氏は「もっと古く溯った時代には男性のシャーマンもいて、巫術によって運勢の予知、判断、禁厭（まじない）、病気の治療などをしていたらしいし、現在僅かに残る習俗や宗教的儀礼への子細の観察と分析の上からも証拠だてることは可能だ」[3] と述べているように、昔は男のツスクルもいたようである。それでも、更科源蔵氏も「巫術をしても、巫小爺より巫婆の方が強く」[4] と述べているように、北海道アイヌでは、女性の方が巫力が強かったと思われる。しかし、樺太アイヌでは、ツスクルにオロッコタイプ（Orok type）とギリヤークタイプ（Gilyak type）があるといわれるように、[5] 隣接民族のオロッコ（Orok）、ギリヤーク（Gilyak）等の強い影響を受けて、男性のツスクルも多くいたということである。

また、同じ外面的特徴として、器用さということが挙げられる。寛政四年（一七九二）の宗谷でのこととして「両手の親指を合せ、是を縄にてしばらせ、其縄にて左右の二の腕の所をも縛り、背中へ縄を回し、能々縛り置に、先燈火を消し、何か唱へ、しばらく過ると座中騒々敷、家の隅にも笹にて撫廻す様なる音し、家内も震動して甚だ物凄き事にて、扨明りを燈せといふ故、火を照してみれば、縛り置たる縄みな解けてあり、又燈火を消し、しばらくの内前のごとく騒がしく、又明りを照らし見れば、以前縛りし如く少しも違ず縛てあり」[6] とあり、昔は北海道アイヌでもこのようなことをしていたようである。また、樺太アイヌでも「樺太の白主に、偉いアイヌのシャーマンがいて、どんな網袋に入れられても巧みに抜けてみせたのですが、網の目は小さければ小さいほど抜けやすく、反対に大きければ大きいほど抜け出すのに骨が折れたということであります。ある時、四寸目の網の袋に入れられて、どうしても抜け出すことが出来ず、方々の神様に頼んだけれども駄目で、最後に炉の中の灰ならしの神様に頼んでやっと出してもらったという話があります」[7] とあるようにツスクルは奇術、手

品の類に長じていたようである。[8] しかし、これは現在ではほとんど行われず、私の調査した所でも全く見出す事は出来なかった。

さて、第二に内面的特徴として、ツスクルになるような人は、幼い時から体が弱かったり、異常体験をしたりしている。

AA媼は心臓病を持っているのであるが、「自分のツスは、体の弱い私の孫がもうとっている。弱いものにしかつかないんだから」と言っていた。このAA媼は、若い時の経験として次のようなことを話してくれた。「私が十六の時に、大川に大水が出たんです。その時は、同じ年の十六になる娘とネキひろいに行ったんです。そしたら、この茶の間位の沼があるんです。水たまりさね。そしたら、こんな蛇が上に浮かんでいて、この位の太さなんです。そして私の手のひらよりまだ頭が大きいんです。マキつかんだまま、こんな太いやつがいる、それ見れ、それ見れと一緒の娘に言っても言っても全然見えないんです。相手（一緒の娘）が見えないもんだから、それそれそれと言っている内に蛇が怒って私をぼってきたんです。こんな足がついていて、頭からこんな位の所に足がついているんです。白いきれいな骨なんです、その足は。にわとりの足みたいなので、そんなのがぼってきたんです。うちの婆ちゃん(母)は竜神さんなんです。ぼってきたもんだから、木もそこに投げて、相棒もそこに置いたまま家に飛んで帰ってきたんです。帰ってきて、こんな蛇が、こんな頭して、足こんなになってぼってきたっていうと、うちの婆ちゃんが火の神さん(Abe-kamui)に一生懸命こうしていうんです。神の姿は自分の先祖からこうやってきたけど、そういう神の姿を見たことはない。一人しかない娘だから、何とかこの娘を助けて下さいっていうことを一生懸命お願いしたんです」。また、KM媼も昔の経験として次のような話をしてくれた。「十六、七の時に畠から帰ってきたら、空の上から立派なものが降りて来るんです。お日さまみたいなのと同じものに長い鎖みたいなものついて、こんな鏡みたいなものキラキラして真直ぐ上の方から降りて来るんです。それがどこに降りたかっていうと、ハヨピラの真直ぐ真向いの山に降りたんです。その見た事私の母に言って、その場所に行ってみるって言ったら、その場所に降りたのなら自分の体についた何かにさわらせれば取るにいいけれども、目かくししているから、宝物お前見ただけでもいいわってそういっ

てくれたんです。それを何回も私の姉さんに言っていたもんです。本当にだれだって見られない立派なもの上から降りて来たんだから。山の上に降りたの、立って見ていたんだから。もう一人、婆一人つれていたのに、あれ婆ちゃん婆ちゃん上から降りてきたもの見えるか、見えるかっていったのに全然見えないんです。そしたら、とうとう降りてしまった。何もおら見えないって婆ちゃん言いながら家に帰って来たんです。私すぐ行ってみたいから行くって言うと、私の母が、だめだ、もう目かくししてしまっている。宝お前見ただけでもいいんだからっていっていたんです。それをちょこちょこ(母に)話し話ししていたんです」。そして、ツスを始めた契機について同じくKM媼は次のように話してくれた。「私はどうしてこういうものを授かったかっていうと、ツスというものを昔からやったわけではないんです。私の長男が負戦争で死んでいるのに、八月二六日の晩から気狂いになってなってどもならないんです。夜になるとベラベラベラベラと何かしゃべって、そうして『水が飲みたい、自分の土地の水が飲みたい』って息子が出るんです。それがツスして出るんです。それまではしたことはないんですよ。そしたら、私の息子達がびっくりして皆呼んでくるんです。そうなって一週間位、昼間はなんでもないんですけど夜になったらなるんです。そうして、ツスになって、それまでツスしたことないのにツスになって、Kさんも皆呼ばられて心配して家に集まったんです。そうしたら、私の息子の話ばかり出るんです。それでKさんがイナウをこしらってくれたんです。イナウを首に入れられて落ちつくようにさせられたんで、それから落ちついたんです。私自信も気狂いとしか思われませんでした。それから憑神さんをつけられてしまってそれからツスするようになったんです」。

これらは確かに異常経験ではあろうが、その精神的資質がそれ程顕著に出ているようには思われない。これらよりは、樺太アイヌのFH媼の方がより一層顕著なものが現われているように思われる。「十四、五の時から、神様につかれて、晩の三時頃になったらもう自分の気持ちが坐っても、立っても、寝てもいられなくなってしまうんです。そして、あくび出るやら、歌いたいやら、今ツスして初めて分ったけども、ツスしたい気持ちが歌いたい気持ちだったと思うの。歌いたいな、今でもふき出して大きな声で歌うたったら、何ぼ気持ちいいかなと思っていたっても、子供

でしょ、そんな事も出来ないし。その時、兄さん達もたくさんいたし、お父さんもお母さんも皆たくさんいたから。しまいには、せつなくなって、うなって転ってあるったんですよ。夜の九時か十時頃まで、苦しんで苦しんで、今度ふあっと何だかに離されたみたいになったら、良くなるんです。外歩いていても、樺太は野原さいけば木の実がたくさんあるもんだから、木の実とりに皆と一緒に歩いていても、上からかぶったもの、荷物でもおろしたような気したら、歩っても歩っても、足が地べたさついて歩ってるんだか分かんない位元気になってしまって、そして山歩いても、どこ歩いても、それこそ小さい木から木を飛んで歩くみたいにして歩ったもんですよ。それでも急に、ふあーとなってきたら、全然眠いんだか、バカみたいになって、歩ってるんだか、歩ってないんだか分かんないんです。そうなっていて、急にパーとなって眼あいたようになったら、今度また元気よくなるんです。そして、気持ちが心の中うずまきでもまかさったみたいな気持ちになってくるの。そういうふうにならなかったら、人間あんなふうにバカみたいなこともしないと思うの。すごい気持ちになるんですよ。晩方、もう三時頃になったら、胸の中もなもスヤスヤして、どうせばいいんだか、もうわけ分からないようになって、どんなことしたらいいんだかも分からなくなってしまうのよ。そうして、歌いたい気持ちが今でも口から大きな声でふき出すくらいにせつないのよ。それが、そのツスカムイのり移って、ツスしたい気持ちだったっていうの、年寄って初めて分かったんです」。このような気持ちが三八歳頃まで続いて、やがて本式にツスするようになったということであった。

同じ樺太アイヌで次のような例もある。「彼が若い頃、意識を失って、自分がまるで鳥にでもなって空中を飛んでいるかのように感じたことがある。その時、彼は絶えず墜落して木片微塵になりはしないかとふるえていた。しかし、幸にも、彼は砂浜で忘我の状態から目覚めたのである。彼を探し廻っていた両親は、やっとのことで、ひざまで水につかって、入江の中をこいでいる息子を見付け出した。皆は彼の様子を見てすぐ、彼の中で『コシンプ（精霊）』が蠢いて、彼の魂が将来さまよう運命にある様々な道を教えたのだと語りあった。そして、シャーマン儀式に必要なありとあらゆる物が持ち込まれ、それが彼に手渡されると、彼は歌をうたい、太鼓をたたき、シャーマンの仕草で踊り

始めた。これは、彼を選んだ『コシンプ』が、彼の手と言わず足と言わず全身に取り附いたためである[9]」。

「彼は三〇歳の頃、私の山へ黒貂狩りに行った。森の中に入ると、四囲の木々は皆、大きくかしいでいるように思われた。この木々の中に、彼は一軒の住み家があるのを認めたのである。そこで、尚も近づいて行こうとすると、その家は消えた。と、すぐに又、わずかばかり先に、立派な身なりをした二人の人間が目にとまった。だが、近づこうとすると、彼等もすぐに消えてしまった。家に帰ってから、この不思議な話をすると、彼の家族は、再び狩に出るなと固く言い聞かせた。その後一年ばかり、静かに家に腰を落ちつけていたが、突然、奇妙で不思議な力にとらえられ、シャーマンが良く出すような叫びを上げ始め、小屋を跳び出し、海に飛び込んだ。皆は彼を海から引き上げ、彼に太鼓を渡した。こうしてそれ以来、彼はシャーマンになったのである[10]」。

これらは非常によく似た点を持っており、ツスクルになるような人は、大体がこのような経験を持っている訳であるが、これをヒステリーとみるか、精神分裂病の一形態とみるか、いろいろ議論の分かれているところである[11]。

さて、このような資質は、多く遺伝するもののようである。AA媼は、自分の家は代々ツスの家系で、自分は五代目だといっていた。また樺太アイヌのFH媼は、父親、母親、叔父、叔母、皆ツスをやったといっていた。杉浦健一氏は、詳細に日高沙流川筋の家系を調べた上で「tusu（巫術によって神意をきいたり、病気をなおしたりすること）の才能、ikoinkar-mat（産婆）をする才能、ユーカラを伝承する才能の如きものは、一つの huchi-ikir を辿って伝わるという。それは習得するというより、天賦のものと考えているらしい。例えば鍋沢テキ氏の母、祖母、曽祖母などの shine-upshor の人々に産婆と tusu の才能が伝えられているので、彼女は特に習得したというのではなく、自らやってみると自然に産婆や tusu が上手にできるようになったという[12]」と述べている。この産婆については、AA媼も何もしらなかったけれども、やったら自然に出来たといっており、代々産婆もやっていたということであった。さらに瀬川清子氏も、貫気別、T媼の言として「産婆、イム（一種の精神異常発作）、ツス（tusu 占）の出来るシネウプソルの系統がある[13]」と述べている。

このように、遺伝ということは、またイムにも見出さ

れ、KM媼は「イムは、私の母親がやっていました。その母が急に神経痛で血管が切れて一週間で死んでしまいました。死んだ間もなくから私がイムするようになったんです」といっていた。しかし、AA媼は「シサム（日本人）の娘もらって育てた人がイムしていて死んだら、そのシサムの娘が今度はイムするようになる。だから、血のつながりということでなく、イムカムイ、ツスカムイが居るとしか考えられない」とも言っており、全て遺伝するということに少し問題が残るのではあるが、遺伝が非常に強く出ている事は事実である。

第三に社会的特徴として、ツスクルは村人の危機を救済するということが挙げられる。

アイヌの信仰のところでも見たように、アイヌは非常にアニミスティック(animistic)な世界観に基づいて生活をしているわけであるが、それは日常生活の様々な方面に見出される。例えば病気についてであるが、アイヌは疱瘡のことをパコロカムイ（pa-kor-kamui 年を・支配する・神）という。このカムイは、多くの眷属神を従えて沖の国から来て、年々歳々アイヌの村々を訪れ、沖の国へ去ってゆく、すなわち世界の果てから果てへ回って歩くカムイと考えられている。アイヌは神々のことを、神の国に於いて人間と同じ姿をし、人間と同じ生活を営んでおり、人間の国を訪れる時、仮装してやって来るのだと考えているのであるが、このパコロカムイの人間の国を訪れる時の仮装は、渡鳥であると考えているようである。(14)

この一事でも伺えるように、アイヌにとってそのふりかかる様々な災難等は、全て神霊によって引き起こされるのだと考えられているのである。そこでこれらの災難等に対して前に述べた占いが行われるのであり、その最も直接的で有効なるものがツスクルによるものなのである。よってツスクルには様々な問題が持ち込まれ、その解決が求められることになる。

このツスクルに持ち込まれる問題を整理してみると、大きく物質的問題と精神的問題とに分けられ、物質的問題はさらに肉体的問題と物品的問題とに分けられる。

肉体的問題には、病気、怪我の治療、出産の手伝いといったものがある。この病気には、アイヌに手のひら療法とでもいうべきものがあり、ツスクルに患部をなでさすってもらうだけで病が治ることもあるという。(15) 次の物品的問題には、失せ物捜索、窃盗犯の捜索、家出人の捜索といった

ものがある。

また、精神的問題には、様々な予言、猟運回復の相談、災行災難の阻止の相談、悪疫阻止の相談といったものがある。

以上の分類は全く便宜的なもので、例えば予言といっても物質的なものに関るものも多く、必ずしも適切ではないが、一応以上のように分けておく。[16]

このように、MN媼も言っていたのであるが、これらの問題を引き受けてくれる機関を持たないアイヌは、それを信仰によって捉え、解決しようとしてツスクルのような霊能者を求めることになるのである。

最後に第四の文化的特徴として、ツスクルはアイヌ文学等の発生の基盤になっているということが挙げられる。

久保寺氏はこれを次のように図式化している。

- tusu-sinotcha（巫謡）一人称叙述→kamui yukar（自然神の神謡）・oina（人文神の神謡）→yukar（英雄詞曲）・menoko yukar（婦女詞曲）→kamui uwepeker（神々の昔話）・ainu uwepeker（酋長の昔話）→panampe-penampe uwepeker（川下の者と川上の者の昔話）・shisam uwepeker（和人の昔話）三人称叙述
- tusu-sinotcha（巫謡）一人称叙述→yaishamanena（抒情歌）・iyohaiochish（哀傷歌）
- 巫女の乱舞→原始舞踊→tapkar（男子の踏舞）→rimse, horippa（女子の舞踊）
- 巫女の祭器 tonkor（五弦琴）・mukkri（口琶琵）・蝦夷胡弓→楽器[17]

この巫謡がアイヌ文学の基盤であるということを最初に言ったのは金田一氏で、「アイヌの口碑文学が、すべて第一人称に出来てゐる不思議が、久しい間の私の懸案で、人にも質し、物にも発表してその解釈を待ち望んで居たのであったが、之を託宣の形なのではないかと、一言解釈の曙光を最初に投じた人は、折口信夫氏であった。それ故、私のこの解釈は同氏のヒントに基いたものであって、この見方によって、我々の間の多年の難関が一時に突破され、これに由って、アイヌ神謡の起源の秘密を啓く所の秘鑰を見出すことが出来たのであるが、思ふに、これは、ひとりアイヌ神謡の起源の問題ではなくして、人類の持つ、神話そのものの少くとも一部の起源、引いては、叙事文学といふものの発生の考の上に、一転期を画する発見であったと思ふ」[18]と述べ、その文学発生の基盤としての重要性を強調し

ている。

これからも伺えるように、ツスはアイヌの文化的方面に於いて、非常に大きな影響力を持っているわけであるが、これは最近までその痕跡を持ち、神謡を最も多く伝え、それを皆に語って聞かせるのは大体がツスクルであったという。[19]

以上ツスクルの特徴を四つに分けて見てきたわけであるが、この中で特に興味を引かれるのが第二の内面的特徴である。というのは、ツスクルになる者は、このような経験の後、それ程顕著に見出すことは出来ないが、一種のイニシエーション（Initiation）儀礼を行い、それによって心が落ちつき本式にツスをし始めるようになるからである。樺太アイヌのFH媼も、前に挙げたような経験の後、イナウを削ってもらったり、マツバを焼いたりしてツスする仕度を一人前にしてもらうようになってから、心が落ちついてきて、それから本式にツスをやるようになったと言っていた。また、MN媼から話を聞いた時にも、昔はエカシ等にイナウを削ってもらって、それからツスをやったということであった。

このように、アイヌでは東北地方の巫女の場合などに見られるような顕著な形でのイニシエーション儀礼は行われず、日常生活の中で異常な言動があった時にエカシに来てもらって、イナウを削ってもらい、お守りのように首からかけてもらったりして、やがて本式にツスを始めるようになっている。私も随分このイニシエーション儀礼については注意して聞いたのであるが、まずはっきりした形をもったものは、現在では全くなくなっているといってよい。これからはもう、この方面の研究はほとんど不可能のように思われる。

こうして、ツスの構造・機制、ツスとその精神的基盤を同じくすると思われるイム、そしてツスクルにみる諸特徴を述べてきたが、これでツス、ツスクルのいかなるものであるかが大体理解されることと思う。ここではツスの実際（seance）については触れなかったが、以上の叙述はこのツスの実際と相俟って、より一層その理解を深める事が出来ると思われる。このツスの実際については、別の機会をえて発表したいと考えている。

また、このツスと関って重要な問題の一つにシャマニズム（Shamanism）がある。現在シャマニズムについての諸

規定が大体定まってきている所から、ツスをどのようにこの一般的枠組の中でとらえていくか興味深い問題である。

〔註〕

一

(1) Munro, N. G. "Ainu creed and cult" New York, 1963, p. 7. (抽訳)
(2) Batchelor, J. "An Ainu-English-Japanese Dictionary and Grammar" Tokyo, 1889, p. 196.
(3) Munro, *ibid.*, p. 8. (抽訳)
(4) Munro, *ibid.*, p. 8. (抽訳)
(5) Batchelor, *ibid.*, p. 113.
(6) Munro, *ibid.*, p. 11. (抽訳)
(7) Munro, *ibid.*, p. 12. (抽訳)
(8) 知里幸恵『アイヌ神謡集』弘南堂、昭四五、三八—四九頁。
(9) 知里真志保『分類アイヌ語辞典、人間篇』三五九頁。
(10) Batchelor, *ibid.*, pp. 95—96. (抽訳)
(11) 平川善祥「木幣」『北海道開拓記念館研究報告』二、八六—八九頁。
(12) 犬飼哲夫「信仰及び儀礼」『東亜民族要誌資料　第二輯　アイヌ』帝国学士院、昭一九、一〇三頁。
(13) バチェラー・J『アイヌ人と其説話』富貴堂、大一四、九五—九六頁、一一二頁以下。
(14) 大林太良「Inau の起源について」『民族学研究』二四—四、一九六〇、二六頁。
(15) 高倉新一郎「イナウ」『アイヌ民族誌』第一法規出版、昭四七、六三四—六四五頁。
(16) 知里真志保『分類アイヌ語辞典　植物篇』一一九頁。
(17) 高倉新一郎「イナウ」六三四頁。

二

(1) Batchelor, *ibid.*, p. 259.
(2) 金田一京助『アイヌの研究』内外書房、大一四、二九九頁。
(3) 同右、三一頁。
(4) 知里真志保『アイヌ文学』元々社、昭三〇。
(5) 金田一京助『アイヌの研究』三〇二頁。
(6) 犬飼哲夫「呪術・巫術」『アイヌ民族誌』六一九—六二〇頁。
(7) 同右、六一三頁。

(8) 藤村久和「霊について」『北海道開拓記念館研究報告』二、八—四四頁。
(9) 金田一京助『ユーカラの研究』(一)、東洋文庫、昭四二、四〇六—四〇八頁。
(10) 昭和五〇年に調査録音。
(11) Batchelor, *ibid.*, p. 259.
(12) Batchelor, *ibid.*, p. 136.
(13) 知里真志保「呪師とカワウソ」『北方文化研究報告』七、昭二七、六〇—六一頁。
(14) 金田一京助『アイヌの研究』二九九頁。
(15) Batchelor, J. "An Ainu-English-Japanese Dictionary" 教文館、大一五、一八一頁。
(16) Batchelor, *ibid.*, p. 181.
(17) Batchelor, *ibid.*, p. 181.
(18) 知里真志保「呪師とカワウソ」五六—五八頁。
(19) 内村祐之他「あいぬノいむニ就イテ」『精神神経学雑誌』四二—一、昭一三、一九—二八頁。
(20) 同右、四七頁。
(21) 金田一京助『ユーカラの研究』(一)、四〇二—四〇三頁。

三

(1) 金田一京助『ユーカラの研究』(一)、四〇〇頁。
(2) バチェラー・J『アイヌ人と其説話』二五八頁以下、二七〇頁。
(3) 久保寺逸彦「アイヌ文学」『アイヌ民族誌』七四六頁。
(4) 更科源蔵『歴史と民俗　アイヌ』社会思想社、昭四三、九九頁。
(5) Kubodera, I. 'An prophetic Songs of Ainu Shamanesses'『駒沢大学文学部研究紀要』二九、昭四六、三一頁。
(6) 串原正峰「夷諺俗話」『日本庶民生活史料集成』四、三一書房、一九六九、四九五頁。
(7) 知里真志保「ユーカラの人々とその生活」『知里真志保著作集』三、平凡社、昭四八、二五—二六頁。
(8) ピルスッキ・B「樺太アイヌのシャーマニズム」『北方文化研究報告』十六、昭三六、一九三—一九四頁。
(9) 同右、一八四頁。
(10) 同右、一八四—一八五頁。
(11) 和田完「シャーマンと精神障害」『東洋文化』四六・七、昭四四。
(12) 杉浦健一「沙流アイヌの親族組織」『民族学研究』一六

—三・四、一九五一、二一頁。

(13) 瀬川清子「沙流アイヌ婦人の upshor について」『民族学研究』十六—三・四、六六頁。

(14) 知里真志保「アイヌの疱瘡神パコロ・カムイに就いて」『分類アイヌ語辞典　人間篇』三五九頁以下。

(15) 知里真志保『分類アイヌ語辞典　人間篇』二七三—二七四頁。

(16) 私自身の蒐集資料、及びピルスッキ・B「樺太アイヌのシャーマニズム」を参考に分類した。

(17) 久保寺逸彦「アイヌ文学」七二五、七四七—七四八頁。

(18) 金田一京助『ユーカラの研究』(一)、四二九頁。

(19) 私自身KM媼から神謡(kamui yukar)を聞かせてもらった。

○ AA媼・KM媼については昭和四七年日高地方での調査資料による。

樺太アイヌFH媼については昭和四八年網走での調査資料による。

MN媼については昭和五〇年日高での調査資料による(但し媼自身はツスはせず、姉がツスクルであったという)。